『愛と献身のかおり』ヨハネ12:1-11

12:1 過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた。そこは、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロのいた所である。
12:2 イエスのためにそこで夕食の用意がされ、マルタは給仕をしていた。イエスと一緒に食卓についていた者のうちに、ラザロも加わっていた。
12:3 その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、香油のかおりが家にいっぱいになった。
12:4 弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、
12:5 「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。
12:6 彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。
12:7 イエスは言われた、「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。
12:8 貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない」。
12:9 大ぜいのユダヤ人たちが、そこにイエスのおられるのを知って、押しよせてきた。それはイエスに会うためだけではなく、イエスが死人のなかから、よみがえらせたラザロを見るためでもあった。
12:10 そこで祭司長たちは、ラザロも殺そうと相談した。
12:11 それは、ラザロのことで、多くのユダヤ人が彼らを離れ去って、イエスを信じるに至ったからである。

●序論
香りというものは記憶と強く結びつく…。これは科学的にも実証されているらしく、人間が持つ五感の中で唯一、嗅覚だけは脳の海馬と呼ばれる記憶域に直接保存されるらしく、それだけに記憶と強力に結びつくものとなるらしいです。
今日この福音書の記者ヨハネは、強い香りの印象を表現しています
:3　…すると、香油のかおりが家にいっぱいになった。
今日ここで、ヨハネはその香りに導かれた3つの記憶をここで記しているのです。

●本論
Ⅰ．マリヤの愛と献身の記憶として
「献身的な愛」。それは「相手の利益を第一に考え、自らの犠牲を厭わない。 見返りを求めない姿」とありました。
まさに今日、ヨハネを通してこの福音書に記されたマリヤの姿がそうでした。
:3 その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。
マリヤのしたことは驚くべきこととして取り上げられています。
その香油はわかりやすく約300ｇで300デナリ（おそらく、当時の男性労働者の1年分の年収相当）くらいする高価な香油を一度にイエスに用いたのです。。

そんなマリヤを、イスカリオテのユダが非難したとありますが、並行記事には他の人たちからも非難されたことがわかります。

マタイ26:8-9 すると、弟子たちはこれを見て憤って言った、「なんのためにこんなむだ使をするのか。 それを高く売って、貧しい人たちに施すことができたのに」。

あるクレジットカードのCMで、「プライスレス」という言葉をよく使っていました。

「とても高価で、値段のつけようがない。いやお金では買えないような価値あるもの」のこと。たとえば、愛する人や家族との時間など、お金では買えないほど大切なものとして表現する。振り返ってマリヤにとってのプライスレスはこのところでのふるまいだったのです。

マリヤがあの高価なナルドの香油を惜しげもなくイエスさまに注いだとき、だれもがマリヤがなぜそうまでしたのかは、ある程度理解はしていたと思います。

それは、兄弟ラザロを死からよみがえらせてくださったことの感謝だったと。

ただ、それがナルドの香油だったということ。さらには、当時の女性が最も大切にしていた自分の髪の毛を用いて、イエスさまの足を拭うために用いた姿。それまでだれも見たことがないほどのふるまいに衝撃を受けた…というのが事実かもしれません。

こうして、”お金の賢い使い方を知る” 現代の私たちもまたそれを目にしたとき、「ああ、もったいない」と思ってしまうのが事実なのではないでしょうか。

献身や無償の愛に慣れていない私たちは、自分たちの計算で理解できる感覚こそ正しいと思ってしまいがちです。

しかしイエスさまは、こう言われたことを覚えておいてほしいのです。

マルコ14:6 するとイエスは言われた、「するままにさせておきなさい。なぜ女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。

あの家に満ちあふれたナルドの香油のかおりは、この福音書記者たちにあのマリヤの献身のありさまをイエスさまの言葉と共に記憶につなぐものとなったのです。

Ⅱ．ユダの裏切りの記憶と

ヨハネの福音書では、その香りにつながるものとして、イスカリオテのユダのことばと裏切り。積み重ねていた不正がすべてつながって記憶されていたことがわかります。

:4-6 弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った、「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。 彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。

それは正論としてほかの弟子たちの同意も呼ぶものであった。悔しいことに自分たちもそれに同意していたという…記憶とも なっていたのでしょう。

イエスさまもユダの言うことを否定していません。その上で、マリヤを非難しなくてよい…とやさしく語るのです。

:7-8 イエスは言われた、「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。 貧しい人たちはいつもあなた

がたと共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない」。
貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるのだから、いつでもそのようにしてあげたら良い。むしろしてあげなさい、と言われるのです。しかし、マリアを非難しなくても良い。　わたしのために、すなおな献身と愛をあらわしているのだから…と。

ヨハネは、その家中に満ちたナルドの香油のかおりとともに、見た目や賢い計算ではない。イエスさまがご覧になった、本当の愛と献身をわたしたちに示していることを覚えたいのです。

Ⅲ．キリストの葬りの備えと

:9 大ぜいのユダヤ人たちが、そこにイエスのおられるのを知って、押しよせてきた。それはイエスに会うためだけではなく、イエスが死人のなかから、よみがえらせたラザロを見るためでもあった。
:10 そこで祭司長たちは、ラザロも殺そうと相談した。
:11 それは、ラザロのことで、多くのユダヤ人が彼らを離れ去って、イエスを信じるに至ったからである。

さてここで、マリヤはある種の強い思いをもってそこにいました。
ここでも、マリヤは何も語っていません。ただ周囲の非難を受けるままでした。
しかしイエスさまは、マリヤの行為と心をすべて知り、そして言われたのです。

12:7 イエスは言われた、「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。

並行記事でもこうあります。

マルコ14:8 この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。

この出来事の一週間後、イエスさまは十字架につけられ、そして墓に葬られます。
イエスさまは、それまで何度も御自分が祭司長や長老、律法学者たちに捕らえられ、そして、異邦人(ローマ兵）の手に渡されて殺されること、そして三日目によみがえることを告げてきていました。それは私たちの罪の代価として…と。
しかし、その言葉を聞き、その備えをしたのは、弟子たちではなくマリヤでした。
ナルドの香油は、他のだれかのためにとっておいたものではありません。イエスさまのためにそれをとっておいたというのです。イエスさまが知っておられました。

:7 イエスは言われた、「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。…」

さいごに）

ルカ10章に、マリヤがイエスさまの足もとに座って御言葉に聞き入っていた姿が描かれています。　彼女について、こう語られている言葉が印象的です。

10:42 しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。

それは、多くのなすべきことにまさって、イエスさまのみ声に耳を傾けることを選ん

だという風に語られるところです。
そうしてマリヤはそのイエスさまがご自分について語られてきたことを聞いてきた。そしていつかその時のためにと、ナルドの香油を備えていたことがわかります。そしてこの時だと気づいて、”もったいない…”など関係ない、すべてをささげてその愛をあらわしていったのです。それが彼女の献身、彼女の愛でした。
当時の権力者たちの悪意が迫る、そんな暗闇に。確かにやって来る十字架への受難を前に、このマリヤのふるまいを振り返って、その家に満ちたナルドのかおりとともに弟子たちの印象に残ったのです。
どんな匂いだったかが重要ではありません。それが信仰にある献身という美しい輝きをそこで記憶と結びつけて刻んだのです。イエスさまもこう言われていました。
マルコ14:9 「よく聞きなさい。全世界のどこででも、福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」。

この福音書記者たちがその記憶を持って証をしている、それがマリヤの献身と愛のかおりです。それは、またキリストご自身の十字架と葬りを記憶に残す愛の香りとして弟子たちの記憶に残ったことを覚えていただきたいのです。
のちの伝道者パウロはこういう言葉を残しています。
エペソ5:2(新共同訳)　キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。

その愛が、わたしたち一人一人を通してあらわされていく時、あのマリヤがささげたあのナルドの香油のように、
12:3　･･･すると、香油のかおりが家にいっぱいになった
という、愛の記憶に結ばれていくようになると信じるのです。